

2025年2月23日

年間第7主日

菊地 功 枢機卿 メッセージ

希望の巡礼者として聖年を歩んでいるわたしたちに、ルカ福音は、「あなた方の父が憐れみ深いように、あなた方も憐れみ深い者となりなさい」と呼びかけています。

教皇様は大勅書「希望は欺かない」に、「希望をもって将来を見ること、それは、伝える熱意にあふれた人生観をもつことでもあります (9)」と記し、その上で、「聖年の間にわたしたちは、苦しい境遇のもとで生きる大勢の兄弟姉妹にとっての、確かな希望のしるしとなるよう求められます (10)」と呼びかけておられます。わたしたちは、豊かに愛してくださる神の愛とあわれみを具体的に生きる者となるように招かれています。

いくつかの具体的な困難の事例を挙げられる教皇様は、その中に、「難民や移住者」の現状をあげ、そういった方々にとっての「希望のしるし」となるようにと、教会に呼びかけます。

「偏見や排斥によって、彼らの期待がくじかれることがありませんように。一人ひとりをその尊厳ゆえに喜んで迎えることには、だれもが望ましい未来を築く権利を奪われないようにする、責任が伴います。国際的な緊張状態によって、戦争、暴力、差別を避けるには逃げるしかない多くの亡命者、強制移住者、難民には、安全、就労、教育の機会を保障すべきです。それらは、新しい社会環境に溶け込むために必要な手立てなのです (13)」

その上で教皇様は、「キリスト者の共同体にはつねに、もっとも弱い立場の人々の権利を守る用意がなければなりません。よりよい生活への希望をだれ一人奪われることのないよう、広い心で歓待の扉を開け放ってください」と、わたしたちに呼びかけておられます。

ルカ福音は、人の生きる姿勢について、この世の常識とは真っ向から異なる選択肢を掲

げた後に、「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」と記します。

わたしたち自身は、自分が何をしてほしいのかを、どうして知っているのでしょうか。わたしたちは自分自身を大切に思い、自らの身体と心の声に真摯に耳を傾けるからこそ、自分自身にとって何が必要なのかを識別することができます。

「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」という言葉は、わたしたちに隣人への思いやりの心を求めます。隣人の声に耳を傾ける姿勢を求めます。隣人のいのちの尊厳を尊重し、そのいのちを守り、共に生きていくことを求めています。

さらに福音は「人を裁くな」と言われたイエスの言葉を記します。わたしたちはそもそも簡単に他者を裁く存在です。あたかも自分により正義があると思込み、様々な手段を通じて幾たび人を裁いてきたことでしょうか。正義はどこにあるのでしょうか。いのちに対する暴力がはびこるこの現実の中で、わたしたちは不安のあまり寛容さを失い、安易に他者を裁いては安心を得ようとしています。そのようなわたしたちに対して、ルカ福音は主イエスの言葉として、「あなたがたは自分の計る量りで計り返される」と伝えます。この言葉こそは、わたしたちひとり一人の心に深く記しておきたい言葉です。